
扉越しの体温

有里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

扉越しの体温

【Nコード】

N3132W

【作者名】

有里

【あらすじ】

サイトより転載。

「なあ刑事さん、ここを開けたらどうなると思う。」真面目腐った声で何を言うかと思えば……。この扉が開けば真ん前に手前がいて、そりゃあ手前を逮捕するしかないだろうよ。……逃げ続けた者とそれを追い続けた者の会話。

「なあ刑事さん、」

頑丈なくせに随分と薄っぺらい扉だから、向こうの声ははっきりと聞こえる。そしてその熱い吐息も。

「なあ刑事さん、ここを開けたらどうなると思う。」

真面目腐った声で何を言うかと思えば……。

この扉が開けば真ん前に手前がいて、そりゃあ手前を逮捕するしかないだろうよ。

「……………そうだよな、だって俺は犯罪者でアンタは刑事さんだもん
な、」

ああそつだ。手前は犯罪者で、しかも今までの罪状から死刑は免れない犯罪者で、俺たち刑事が捕えなくてはならない男だからな。

「……………」

ギシ、と何かが凹むような鈍い音が鳴って、扉の向こうにいるはずの手前がこのドアに寄り掛かったのだと知る。何の変哲のない、それでも一人でぶち破るには困難な頑丈な造りの扉を挟んで、俺と手前は何をするでもなく動けないでいた。

「……………変な感じ。今まで逃げ続けてきたけど、でも結局捕まるのか
って思うと、変な感じだよ。…」

何だかひどくぼーとした声が言った。ああ、手前はちょこまかと逃げることだけは上手で、俺たちはひどく手古摺らされた。何年、何十年、手前を追い掛けたと思ってんだ。あの頃と比べると俺の手はカサカサになって急激に皺が増えた気がして、あちこちにガタがきて、随分弱々しくなったものだ。使い古した銀の手錠がやけに重く感じられる。

「は、刑事さんが年を取ったって言うのなら俺だって同じだけ年を取ったさ。……ここ何年かは極力外へ出ないでひっそり暮らしていたんだ。近所の人からすれば、怪しい無口な独り身の中年男ってとこかな。」

ははは、と乾いた笑い声を立てて、手前は口を閉ざすことなく続ける。

「見付かるとは思わなかった。ああ、そうだ、それだけ自信があったよ。完璧に、善良な市民を演じていたんだ。……まあ、……何しろ若い頃と同じ感覚で動いちまうと体がきつくて、静かにせざるを得なかったけどな。……出来ることなら、見付からないでこのまま一人で死んでいければ万歳だって思っていたのになあ。……だけどやっぱり、因果応報って奴かな。」

しゅん、と肩を落とす様が、扉の向こうに見えた気がした。

そうだ、ある時からはたと手前の動きが読めなくなって、まさか死んじまったのかと思った時もあった。まさかな。どこに隠れてやがったのか、手前を見付けるまでに、……こんなにも時間が掛かったのか。その間に、いつの間にか若さだけが取り柄だったような手前がただの中年の男になったなら、俺だって同じだ。仕事に夢中な男は妻に逃げられて子供も失った。仕事だけが取り柄だった若い男

も、時間が経てば、手前の言う怪しい無口な独り身の中年男と同じもんだ。

「……………だけどさ刑事さん、」

ふ、と無理やり明るい声を出しているような、奇妙にわくわくとした態度が扉の向こうに感じられた。何だろうと思ってみれば、だけど待てども待てども、手前は急にだんまりを決め込んで何も言わない。

俺は鍵のかかったドアノブに手を伸ばして、だけど、手を下ろした。そして俺も黙ったまま扉に背を向け、そっと寄り掛かった。それと同時に、はあと思わず吐息をつくような感覚で手前が言う。

「……………アンタ、執念深いんだなあ。しつこい男は嫌われるって習わなかったか。」

なぜだかその言葉にぎょっとして、文句の一つを言ってやろうと口を開き掛けたが、手前はそれを遮ってからから楽しそうな笑い声を上げた。

「だけどさ刑事さん、俺も結構執念深い性質なんだ。追い掛けられると逃げ出したくなるし、かと言って諦められると今度は俺が追い掛けなくなる。どんなことしても、俺を探して追い掛けてほしい、ソイツの頭の中を俺だけでいっぱいにしてやりたくなる。俺しか見えない目、俺の声しか聞こえない耳、俺しか求めない腕、…」

手前は早口に呟いたが、扉に背を付けていた俺には、直に手前の声の震えが伝わってきた。扉越し、手前の肺がずっと深く息を吸い込んだ感覚、その音さえも。

「……——アンタ、家族も仕事も、プライドさえも捨てて俺を追いつけてきた。何年、何十年？ もう時効になってんのにさ。今じゃアンタも本当は刑事さんじゃないのにさ。だけど、……だから嬉しいんだよ。捕まるのは嫌だけどね、だから、変な感じなんだ。……」

くぐもった声、薄い扉に打ち付ける心臓の鼓動。扉越し、なぜだかそれがひどく大きく響いていた。扉越し、手前の気配が微かに懐かしく仄かに温かく感じられた。

「なあ刑事さん、」

ああ、頑丈なくせに随分と薄っぺらい扉だから、向こうの声ははつきりと聞こえる。そしてその熱い吐息も。

「なあ刑事さん、ここを開けたらどうなると思う。」

真面目腐った声で何を言うかと思えば……。

この扉が開けば真ん前に手前がいて、そりゃあ刑事であれば手前を逮捕するだろうし、刑事でなければ、……どうなるんだろうな。思わずふ、と笑ってしまった俺に、手前は真面目腐った声のまま、

しかしどこか緊張を孕んだ声でさりと云った。

「なあ刑事さん、ここを開けたら、……——再会の熱い抱擁で
もしようかと思っただけど、どう？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3132w/>

扉越しの体温

2011年11月13日15時53分発行